

「個を生かすチーム作り」



水泳部コーチ

理工学部 高橋雄介先生 ご紹介

中央大学水泳部の競技者として活躍、トヨタ自動車へ就職後、水泳競技のコーチングの指導を受けるために、5年間アメリカ(アラバマ大学)へ留学する。そこで、アメリカの水泳の父と言われるダン・ギャンプルル氏に師事、当時一緒に指導を受けたメンバーが、現在、世界の水泳界をリードするコーチ陣となっている。帰国後、中央大学の教員として水泳部のコーチに就任、大学選手権7連覇を初め、シドニーオリンピックでの活躍は記憶に新しい。常にチャレンジを続けるその姿勢と、学生達の良き理解者として先生の人柄に大きな魅力を感じる。

(広報課 渡辺記)

取材レポート

昨年、私が所属している広報課に提出された取材願いの多くは、中央大学水泳部へのものであった。勿論シドニーオリンピックのメダルトリオ(田中雅美さん、中村真衣さん、源純夏さん)の顔を思い出していたければご理解いただけると思う。日本中の多くの人達から声援を受けた彼女たちは、期待を裏切ることなく我々に感動を与えてくれたのである。本当に「凄い」の一言であった。しかし「世界を相手に互角以上に戦う彼女たちは、本当に『凄い』・・・が、たとえメダルを取ったからといって、人間として『偉くなった』わけではない。」と言いきる先生がいる。その人が今回紹介する水泳部のコーチ高橋雄介先生である。

運動部の練習を見学する時、見学者は一様に緊張する。その部が強ければ強いほど、そして見学者が本格的なスポーツをしたことがなければ、なおさらその緊張感はアップする。私が取材で訪れた時も、やはり緊張感があった。しかし、練習を見ているうちに、その緊張感がどんどん解けはじめた。目の前にいるのは大学選手権7連覇のメンバーや、オリンピックのメダリスト、入賞者達なののである。その答えは意外に簡単に解けた。それは、彼ら自身がリラックスし、厳しいであろう練習を楽しんでいるように見えたからである。その中に、高橋先生の顔が常に見え隠れしていた。選手一人一人に声をかけ、選手からの意見も聞く。この一言一言が選手との信頼関係を作り出し、チームとして、目標を見据えたプロジェクトとしての水泳部を作り上げているのではないだろうか。選手達は、高橋先生のことを「雄介さん」と呼ぶ。これ

も信頼関係のあらわれであろう。昔の体育会系のクラブでは、考えられない情景であった。そんなことを考えながら、高橋先生へのインタビューが始まった。アラバマ大学でのコーチとしての勉強、指導者ダン・ギャンプリル氏との出会い、中央大学の教員として、水泳部コーチへの就任、水泳と他の競技との違い、学生達とのコミュニケーションの取り方、選手それぞれの目標をチームとして実現させている状況など、話は尽きることがないほど弾んだ。



オリンピック出場の6選手
帰国後の報告会

- ・子供達と真剣に向き合わなければ、絶対に良い指導はできない。
- ・コーチが指導を押しつけるのではなく、コーチの持つ情報を競技者達に伝えて使ってもらおう。
- ・昨日と同じトレーニングでは、昨日以上の結果は生まれない。常に新たなトレーニングを考えチャレンジしていく。

これらは、特別なことではなく、当たり前なことなのかも知れない。しかし、これを確実に実践するのが、いかに重要なことであり、難しいことであるかを教えられた気がする。更に、一流の競技者になることも大切だが、それ以上に、一流の人間になって欲しいという願いが強く感じられたインタビューでもあった。

それぞれの目的に向かって、前向きに頑張っている競技者達へ大きなエールを送りたい。

(広報課 渡辺記)